

## 工業高校英語授業での『魔法の英語』と”There is a hole”で理想的な授業開き 研究員 中西 毅

- 1 はじめに
- 2 寺島先生ご夫妻との電話で晴れた霧
- 3 授業計画
- 4 授業開き
- 5 それぞれのクラスの様子
- 6 生徒の声
- 7 終わりに～授業中に生徒が自主的積極的に学習にとりくむしかけの極意～
- 8 書き足し～実践後の寺島先生からのアドバイスと実践を振り返って感じたこと～

### 1 はじめに

年度初めの教科会議で、去年からの持ち上りの3年生2クラス（2単位）と、新しくもつ1年生2クラス（3単位）と2年生2クラス（2単位）と3年生1クラス（2単位）の、合計7クラス16時間を担当することになりました。

はじめは、初めて持つ1年生と2年生については、「基本三教材」をやってから2学期後半くらいから『魔法の英語』を使った授業をしよう、初めてもつ3年生については、いきなり『魔法の英語』を使った授業をしようと思っていました。しかし、どこかに「それでいいのか？」という迷いがありました。

そこで、実践を始める前に、構想を聞いてもらって寺島先生からアドバイスをもらうことにしました。いつもは、学期末に、授業実践を報告することで、寺島先生からアドバイスをいただくという形が多かったのですが、今回は、勇気をもって先に相談してみようと思立ちました。教科会議があったのが、4月4日で、授業が始まるのが4月11日ということで、準備の時間があまりなくて急いでいたのですが、結論からいうと、相談して本当に良かったです。電話口からの寺島先生、そして美紀子先生のアドバイスを受けて、今年度どのような授業をどう進めていくのかが、本当にくっきりしました。そして、授業が始まってしばらくたちましたが、生徒たちの学びはどのクラスでも、非常にいい感じです。今のところ、4月当初にたてた見通しが、間違っていない、あの時電話させてもらって本当に良かったと思える毎日です。

この文章では、寺島夫妻のアドバイスを受けて、私が2019年度の授業展開をどう見通しているか、生徒たちの学びはどう変わったか？基本三教材や『魔法の英語』を使った効果的な授業はどうあるべきか、そして生徒が自主的主体的に学習に取り組める授業づくりはどうあるべきかなどを考察していきたいと思えます。

### 2 寺島先生ご夫妻との電話で晴れた霧

担当するクラスが決まった、2019年度の4月当初に、寺島先生に、「現時点でのクラス別今年度の授業計画」の叩き台を送付させてもらって、それを受けて電話で相談させていただきました。美紀子先生が、大学の授業で『魔法の英語』を非常に効果的に使われたという実績をお持ちということで、電話口には、寺島先生と美紀子先生お二人が出られているとい

う、ものすごく贅沢な状況で、アドバイスをいただきました。

お二人との2時間近いお電話でのアドバイスのポイントを以下にまとめてみました。

- 1 基本三教材から始めないといけない訳じゃない
- 2 『魔法の英語』を進捗の見通しなしのマラソンでやらせるのは危険
- 3 基本三教材を音声教材としてのみ使う手もある
- 4 テストは見える学力に絞るべき

以下、項目ごとに詳しく記述していきたいと思います。

## 2-1 基本三教材から始めないといけない訳じゃない

寺島先生には、事前に、「基本三教材」のテキストを1冊送ってほしいとお願いしていましたが、なぜかという、今まで、hole や house や turnip を授業で実践してきたのですが、かなり我流でやってきたので、一度「王道のやり方」で三教材の実践をやってみたいと思ったからです。寺島メソッドに初めて出会う生徒にはやはり、基本三教材から入るしかないだろう、「リズムの等時性」と「語順」という「英語学習の幹」を基本三教材で身につけるのが自然だろうと、どこか決めつけていました。

そんな私に、寺島先生から予想もしない一言が。「実は、基本三教材を授業で使いこなすには、熟練の技がいる。中途半端にやっても生徒には何も残らない。なので、基本三教材から始めるよりは、『魔法の英語』ではじめたほうがいい。」

いわれてみて、確かにそうです。私も基本三教材をフルコース生徒にやらせて2~3年になりますが、「三教材をやったからといって本当にリズムの等時性や英語の語順の特徴が生徒に身についたか？」と問われたらとても自信がもてません。寺島先生や美紀子先生や他の研究仲間の先生方の授業で、変わっていった生徒たちと、私の授業を受けた生徒たちの変化を比べると悲しくなるくらい、「魔法にかかった」生徒は少数でした。寺島先生の「『魔法の英語』から始めた方がいい。」というアドバイスが説得力を持ち始めました。

## 2-2 授業で『魔法の英語』を効果的に使うには

そこから、話は『魔法の英語』を正規の授業でどう進めていくのが効果的かの話になりました。そのポイントは、大きくわけて（あ）解答を先に配っておくのか（い）進度表の作成と点検日の固定（う）最低限タスクとボーナスタスクの3つでした。

### 2-2-1 解答は配るべきか

結論から言うと、寺島先生は「配る派」で美紀子「配らない派」。つまりどちらもありということでした。ただ、配るにしてもあくまで解答は「困った時に見るもの」という抑えは大事だということを、寺島先生は強調されていました。解答にせよ友達のを写すにせよ、それを否定しないのが寺島メソッドです。1番学力が低い生徒というのは、答えを写すことさえもできず、人の支援を受けようと動き出すことも出来ずただただ止まったままの生徒。それを考えたら答を先に配っておいて、それを写すのもありとするのは別に間違っているわけではないのですが、それを表立って推奨するのは良くないとの先生のお話でした。

配らない派の美紀子先生がおっしゃっていたのは、学習者自身が「自力でやったところと助けを借りたところ」を自覚させることが肝要ということでした。

では、僕自身はどうするか？今は、「配る派」で行こうと考えています。答えを丸写しする生徒はたぶん少数であると思われます。答えを配ろうが配らまいが、自分で考えるのをあきらめている生徒は、答えを見るより、友人の解答を見せてもらうほうを選ぶでしょう。

それと、昨年度の僕の実践の中で、解答を配布した実践を行ったクラスのある生徒が、こんな感想を書いてくれました。「あっているかどうか不安なところだけ解答を見て確認したいから、解答があつて良かった」。意欲と力のある生徒は、極力答えを見ずに、わからないところだけや、自信が無いときにだけ答えを見る。実際今の授業現場でもよく見る風景です。

結局、『魔法の英語』を授業で使う究極も目標は「英語の構造（せんまるせんなど）を身に着けること」なのです。だから、答えを写したか、自力でやったかはそんなに重要ではないのです。それよりも、大事なのは声かけです。生徒が、チェックを受けに来た時に、「動詞の記号には半丸もあるやろ？全丸と何がちがうんかな？」や、「英語は後ろから説明やから、この前置詞のまとまりの取り方、ちょっとちがうで」という英語の構造を解き明かすような効果的な声かけをすることが大事になってくると思います。

なので、答えを写させないことよりも大事なのは、チェックを受ける時に「間違いを見逃さない」ということなのです。ここを疎かにすると、どんどん学習が「単位をとるためのやつつけ仕事」に陥っていきます。点検の長蛇の列ができていの中で、生徒がどこを間違っているか指摘して自分で直させて再度並ばせるのは、生徒に申し訳なく結構プレッシャーになるのですが、絶対守らないといけないことだと気づきました。

繰り返しになりますが、解答を配るか配らないかよりも大事なものは、「自分がどこまでわかっているか？」を生徒に自覚させること、そして、教員も一人一人の生徒の理解度をつかむことだと思います。

## 2-2-2 進捗表の作成と点検日の固定

それから、お二人からアドバイスをいただいたのは、「何月何日に何ページから何ページまで進むのかの綿密な進捗票をつくって生徒に公開すること」でした。昨年度、はじめて『魔法の英語』を授業で使ったときに、「1 か月で 20 ページまで終わらせること」という見通ししか与えず生徒にやらせたところ、ある生徒が最後の授業までずっと遊んでいて、最後の授業で一気に 20 ページを終わらせたエピソードがありました。その失敗の理由は 2 つ。1 つは、1 か月で 20 ページというノルマが緩すぎたこと、もう 1 つは、1 日どれだけ進むかの見通しを与えていなかったことでした。

そこで、美紀子先生が大学でやられた方法を教えてもらいました。それは、あらかじめ授業時数を数えて、その学期に進むべきページを確定した上で、何月何日の授業では何ページから何ページまでを点検するというのを生徒にわかるような進捗表を作成し、それに基づいて授業されたことでした。生徒の中には、毎回の授業の長蛇の列に並ぶことをめんどくさがって、一気にやってきたものを一気に点検することを要求してきた人もいたそうですが、美紀子先生は頑として受け付けなかったそうです。その結果、前期の単位をとれなかった生徒もいたそうです。さらに、美紀子先生の研究室に、提出しに来ることも禁じられたそ

うです。とにかく、何ページから何ページまでは、この日にしか見ない、と徹底されたそうです。

一見、ファーストラナーたちの走りを止めてしまうように思えます。しかし、そんなことはありません。これは、今、僕がその方式を取り入れているからこそ、言えることなのですが、点検する日を決めているだけであって、ファーストラナーたちは、点検日など気にせず、どんどん進めば良いだけです。そして、授業が始まってすぐに、点検を受けにきて、終わったらボーナスタスクに取り組む、それも終わってしまえば、どんどん先を予習したり、『魔法の英語』以外のボーナスタスクに取り組めばいいのです。さらに、家で学習したりしない「スローラーナー」たちは、その日の最低限ノルマを突破することに力を注ぎますので、僕が去年やったような「遊びっぱなし」にはおちいりません。点検日を固定することは、ファーストラナーにとっても、スローラーナーにとってもいい方式なのだということを実感できています。

### 2-2-3 最低限タスクとボーナスタスク

先述した通り、指定ページのすべての「問い」については、すべての生徒が必ずその日中にチェックをうけないといけない「最低限タスク」です。そして、fast learner 達に用意するボーナスタスクについては、2種類教えていただきました。1つは、ページについている、「応用問題」・「発展問題」をやること、もう1つは『魔法の英語』の巻頭についている「白文」の英語に、○や□などの記号をつけるタスクでした。そして、これも、いつ出してもいいのではなく、該当箇所はあらかじめ決められた日にしかチェックしないという方式がいいとアドバイスを受けました。

僕は、多様な生徒のやる気スイッチを押せるよう、多様な「ボーナスタスク」を設定するやり方を好んで取ってきたのですが、「ボーナスタスク」を安売りしすぎて、「ボーナスタスク」と「本ちゃんタスク」の互換性がとれていない部分もあったし、ボーナスタスクの点検日も締め切りまでいつでもいいという、「無節操」な面が多々あったので、今回からは、「ボーナスタスクのチェック日も固定する」というシステムを採用してみることにしました。

「最低限タスクの設定」と「ボーナスタスクの準備」は、「先頭と最後尾をつかんで走らせる」ための非常に有効な手段で、僕も今までは、学期の中でこの2つのタスクを意識して設定してきたのですが、今回、寺島夫妻のアドバイスを受けて、学期内だけではなく、毎日の授業内でも、この2つを意識して設定するようになった、というのが、2019年度の僕の授業実践の大きな変化だったといえます。

### 2-3 基本三教材を音声教材としてのみ使う方法もある

「『魔法の英語』の指定されたページだけを授業ですすめるのは、生徒達にとって退屈ではないでしょうか？」という疑問がわいてきました。それに対して寺島夫妻は2つのアドバイスをくれました。1つ目は、美紀子先生が作成された、「『魔法の英語』の英文にリズム読みの記号をつけたプリント」を配って、授業の初めにリズム読みの見本を生徒にみせるのはどうか？ という提案でした。その際は、「リズム読みテスト」などを課さず、ただ、生徒に英語のリズムを感じさせるだけでいいというアドバイスでした。

2つ目は、美紀子先生がおっしゃってくれたのですが「There is a hole を音声教材として使ってから、『魔法の英語』をやるのはどう？」という提案でした。

僕は、2つ目の提案を聞いて、雷に打たれた気がしました。基本三教材は、英文法の幹である、せんまるせんや、後置修飾を体得させるためにあるとかたくなに思っていました。しかし、あの三教材は音声教材としても、「英語のリズムの等時性」を体得する非常に良い教材です。

この美紀子先生の一言で、今年度からはじめて担当するクラスについては、「There is a hole のリズム読み、暗唱をすましてから、『魔法の英語』で英文法の幹をたたきこむ！」という見通しがくっきりと持てました。そして、後で述べるように、この「There is a hole を音声教材として使ってから『魔法の英語』に行く」という流れは、今のところ大成功です。

#### 2-4 テストをどうするか？

これまでは、テストは A3 の両面刷りにして、表は授業でやった内容を問う問題。裏面は、授業振り返り作文（日本語）や自由英作文という問題を作ってきました。しかし、寺島先生から、「テストに出す問題は見える学力にしぼったほうがいい」というアドバイスをいただき、今年度から、そうすることにしました。

もちろん、自己表現の力を日本語と英語でつけることは、英語学習の最終ゴールであることは間違いありません。電話の中で、美紀子先生がおっしゃられた、「本当に生徒につけて欲しいのは自分の思いをきちんとことばにできる日本語力」という言葉がとても心に残っています。でもそれを問うのは筆記テストではなく、必修タスクとして「授業振り返り作文」という形で提出させればよいと考え直しました。

テストでは、動詞や前置詞のまとまりを見抜ける、和訳する、英訳するなど、授業でやったテキストをもとに「見える力」が生徒にどれだけついたかを僕と生徒がはっきりわかるような問題にすることにしました。

ということで、寺島ご夫妻との2時間以上にわたる電話でのお話の中で、本当に僕の中で、2019年度の授業をどうすすめていくか、どんなスタートを切ればいいかがくっきりと見えてきました。

### 3 進度表の作成

お二方との話を受けて、授業を開くに当たって1学期は以下のように進めよう決めました。

クラス	1学期中間まで必修タスク	1学期期末まで必修タスク
H科3年(2単位、1クラス、今年から担当)	There is a hole チームリズム読み、個人暗唱 『魔法の英語』レッスン1~3	This is the house that Jack built. チームリズム読み、個人暗唱 『魔法の英語』レッスン4~7
O科3年・ P科3年 (2単位、各1クラス、去年から持ち上がり)	『魔法の英語』 レッスン9~11	『魔法の英語』 レッスン12~14
M科2年(2単位2クラス、今年から担当)	There is a hole チームリズム読み、個人暗唱 『魔法の英語』レッスン1~3	『魔法の英語』 レッスン4~9
N科1年(3単位2クラス)	There is a hole チームリズム読み、個人暗唱 『魔法の英語』レッスン1~6	This is the house that Jack built. チームリズム読み、個人暗唱 『魔法の英語』レッスン7~10

今年から初めて持つクラスについては、まずは音声教材から攻めてみることにしました。その方が動きのある授業で生徒達も学びに入りやすいかな？という魂胆です。去年からのもちあがりの3年生2クラスについては、『魔法の英語』の残っていた部分をやることにしました。

誤解を招くかも知れないので断っておきますが、毎時の授業の前半を音声教材、後半を『魔法の英語』という展開をしたのではありません。はじめの6~7回の授業はすべて There is a hole の授業。後半の4~5回の授業は『魔法の英語』を使った授業という風にしました。そのやり方で良かったと思います。授業内でいろんな教材を行き来するよりも、音声教材の暗唱までは一気にいききって、一区切りつけてから『魔法の英語』という風にしました。今までは、音声教材と読み物教材を同時に展開する事が多かったのですが、今回のように、完全に分けてやる方が生徒にはわかりやすいと思います。

当初は、H科3年とM科2年については、There is a hole 一本で行こうと思っていたのですが、予想以上に生徒達の取り組みがよかったので、計画を早めて、後半に『魔法の英語』も入れることにしました。

それと、1学期後半については、H科3年については歌をやることにしました。彼らは黙って字を書くという学習があんまり得意じゃないので、活動的な要素が多い音声教材の方が、授業に活気が出るし、授業に参加する生徒も多くなるかな？と思ってそうしました。そして後半は『魔法の英語』で文法を身につけてもらうことにしました。

M科2年の方は、生徒の感想などを見ると、本当に『魔法の英語』がわかりやすかったようで、「英語の仕組みがわかってきた！」という声が大きかったので、『魔法の英語』一

本で英文の仕組みを集中して身につけてもらうことにしました。

N科1年生については、単位数も多いし、生徒の英語力も高いので、音声教材と『魔法の英語』両方をめいいっぱいやっていくことにしました。テスト開け1週目の現時点で、その方式で特に大きな問題は出ていないようなので、よかったです。

#### 4 授業開き

いくつになっても、教員生活がいくら長くても、やはり、年度初めの初めての授業は緊張します。いろいろと考える中で、授業開きには4つの側面があると気づきました。

- 1 生徒同士をつなげる〔1年生は特に〕
- 2 教師が自分のことを紹介する→人となりやこの授業でみなにどんな力をつけて欲しいかのメッセージなど
- 3 成績の付け方など授業ルールを伝える
- 4 教材と生徒をつなげる たとえば教科書のレッスン1を「楽しそう！もっとくわしくしりたい」と思わせるような導入

そういうことを意識して、授業を組み立てました。具体的にどんな授業開きをしたかは、以下の分会新聞をご覧ください。

## 「授業開き こんなんどう？」

先週の金曜日から授業が始まりました。みなさん、今年からもつ新しいクラスもある中で、みなさんどんな「授業開き」をされていますか？私、中西も、今年は、機械1甲、乙、土木3年、建築2甲、乙という5つのクラスを新しく持つことになりました。いろいろ準備してやってみたらけっこう、みんな楽しんでくれていい授業開きができています。うれしい！！

今日は4月15日(月)の2時間目に行った[ ]の授業開きをレポートしちゃいます！

### ①教室は大会議室！

ICTを使いたいのと、グループ活動形式で授業を始めたかったので、教室は大会議室を利用。大会議室のプロジェクターは校務PCから無線で映像が飛ばせます！

各机に生徒が座る座席表をおいておきました。生徒達は、自分の名前が書いてある机を探して座っていました。1年生なので、まだお互いコミュニケーションがとれないので、自分の場所を探すのに苦労していました。チームは4人一組、グループはやはり4人が一番ちょうどいいです。



### ②チーム内の役割分担

まず、前にワンピースのキャラクター「ゾロ、ロビン、チョッパー、サンジ」を写して、各班でだかどのキャラクターを担当するか決めました。まだ、話をしたことがない生徒同士も、これをきっかけに話げできたようです。

### ③ 班対抗早押しクイズ大会

各チームでサンジ役になった人に、前にミニホワイトボードを取りに来てもらいました。そして、パワポで、”It’s brokenを和歌山弁に訳そう” フランスでOlive et Tomというタイトルで放映されている日本のアニメのタイトルは？など問題をだし、正解を書けたチームに景品をあげました。みな、すごく盛り上がってましたし、チーム内でも話げできていました。

### ④ 「イニシャル他己紹介リレー」

つづいて各班でI’m Takeshi. I like talking. みたいな、自分の好きなものを自分の名前のイニシャルで伝えてそれをリレーするゲームをしました。メンバーの名前を覚えるのと、仲良くなるのに役立ったようです。

⑤ その後は、普通に、「どうやったら留年になるか？」の説明や、平常点とテストの割合などの授業ルール、授業の時もってくるものなどの説明をしました。それから、1学期の教材である英語の歌の登場人物を英語でなんというかのプリントを班で協力して埋めてもらいました。みな協力して真剣に取り組めていました。



グループ学習にすると生徒は遊ぶのでは？グループ学習をしてみたいけどやり方がわからない？そういう方もいらっしゃると思います。でも、偉そうに聞こえたら申し訳ないのですが、先生が一人で前で話すだけの授業は、スマホ時代の今の生徒達には、たぶん通用しないと思います。それを打ちやぶる鍵はグループ学習とICTと成績の付け方だと思います。私もそんなたいそうなことはできてませんが、4月16日(火)の3時間目の[ ]、6時間目の[ ]甲の授業を公開しますので、もし興味のある方はのぞきにきてください。場所は特活室となりスマートルーム3です。

クイズなど邪道みたいで恥ずかしいですけど、生徒にとったら、チームで協力してクイズに取り組むのがとても楽しかったようです。特に1年生にとったら、今まで話をしたことがなかったクラスメイトと話をする、いいきっかけになったようでした。

クイズやゲームで場を和ませた後、チームで協力してThere is a holeの導入をしまし



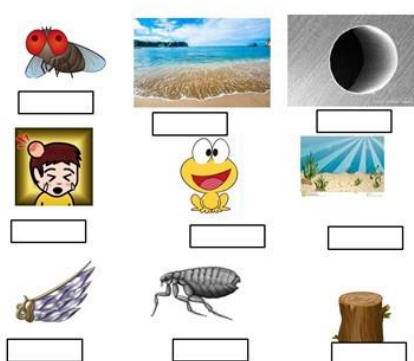
た。前で There is a hole の You tube の動画をエンドレスリピートでかけながら、以下のプリントに取り組みせました。

## 歌“There is a hole”を覚えよう！

Name ( )

タスク1 下のイラストにあった単語を下から選んで記入しよう！

frog, flea, bottom, sea, wing, fly, bump, hole, log



タスク2 歌を聴いて、新しくでてくるものから順に並び変えていこう

( sea )-( bottom )-  
 ( hole )-( )  
 -( )-( )  
 -( )-( wing )  
 -( )

終わったチームから個人で書写をさせました。1回書けて、まだ時間のある生徒には、「もう1回書けたらボーナスポイントが発生するよ！」という風にしました。There is a hole のリズム読み→暗唱にむけてとてもいいスタートがきれました。先述の4つのポイントが本当にバランス良くとれた、自画自賛ですが、教師生活で最高に効果的な授業開きでした。きっと、どんな授業をしていくかの方向性が私自身かっちりと持っているので、授業開きも余裕をもって展開できたからだと思います。

### 5 クラスの様子

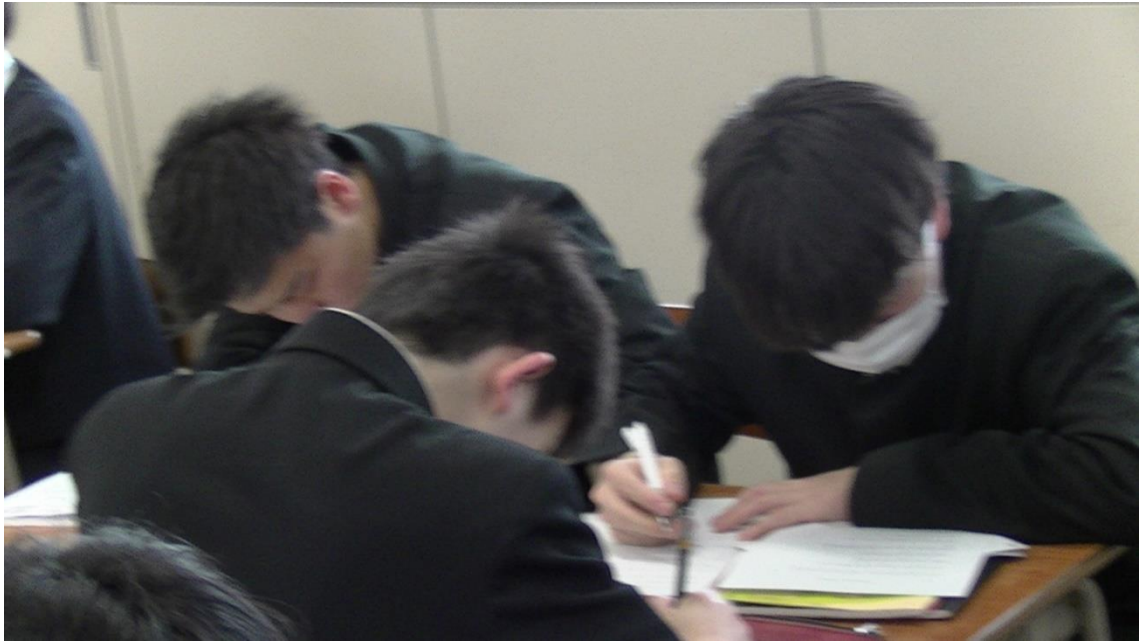
一回目の授業が終わり、いよいよ本格的な「マラソン」が始まりました。ここでは、各クラスの授業の様子をそれぞれ描写していきたいと思います。『魔法の英語』を使った授業と、“There is a hole”を使った授業と分けて説明してきます、

#### 5-1 『魔法の英語』マラソンの進め方

##### 5-1-1 進捗表

以下は『魔法の英語』マラソン一本だった、0科3年生の1学期中間テスト終了時の進捗表です。





書写に取り組む2年生。『魔法の英語』でも2年生は特に授業の初め15分間はものすごい静寂が訪れます。みんな集中して『魔法の英語』に取り組みます。

そのうち、スローラーナーズたちも今日すべきタスクをやりとげて三々五々僕のところにチェックを受けに来ます。スローラーナーズたちは、ボーナスタスクに取りくんだり、とりくまなかったり、はじめに終わらして後で楽をするもの、ぎりぎりまでサボっていて後半追い込むもの、実に様々です。もちろん、友達の問題を写したり、友達の解答を写メでとってラインでまわしてもらったりそんなちゃっかりものもいます。でも、昨年との大きな違いは、ずっと遊び放しの生徒はいなくなったことです。すべての生徒が、50分間ずっと集中している訳ではないですが、メリハリがついてきたと思います。

最近、「そのページの英文で注目して欲しい文法」〔進行形や助動詞など〕を板書しておいて、必修箇所や記号付けボーナスの点検をうけにくる時に、「この to+半人前動詞ではじまるまとまりのこと、なんていうんやったっけ？」みたいに、その日のポイントを一言声かけするようにしています。

ボーナスタスクについても2本立てにしました。『魔法の英語』の応用・発展問題や白文記号つけタスクは、必修コーナーだけでなく、ボーナスタスクについても、点検日をきめてその日にしか点検しないことにしました。また、毎日の授業の最後を書く「授業振り返りシート(30字以上)」も、その日にしかチェックしないボーナスタスクに加えました。それとは別に、FLTの先生とのフリートークなどチェック時が固定されていないボーナスも用意しました。そして1学期後半からは新たなボーナスタスクとして、「同時通訳読み」を導入してみました。僕が語のまとまりごとに英語をいって、それを生徒が瞬時に日本語に訳せたら合格というタスクです。逆に僕が日本語をいって生徒が英語で瞬時に通訳するタスクも用意しています。何人かの生徒が、喜んでチャレンジしています。

必修タスクのもう1つは、生徒の日本語の書く力向上のため、タームの最後に書いてもらう原稿用紙2枚の「授業振り返り作文」です。

ただ、1 学期前半は、テストの点数 VS 平常点（必修タスク突破点＋ボーナスポイント）が 1：1 であり、生徒の取り組みもよかったし、ボーナスタスクの「安売り」もあったので、かなり平均点が高くなってしまいました。なので、1 学期後半はテストの点数 VS 平常点の割合を 7：3 に変えることにしました。ボーナスタスクのポイントも少し下げました。それでも生徒達の学びは今のところ特に変わっていません。しっかり学んでいると思います。

### 5-1-3 There is a hole を使った授業の進め方

次は There is a hole を授業でどう進めたかを説明していきます。以下は前半 There is a hole の学習をして、後半は『魔法の英語』で学習を進めた 1 年生の進度表の最終版です。



2と3がその日の授業内で必ずすべき必修タスク。『魔法の英語』と同じで後から「後出し」はできません。

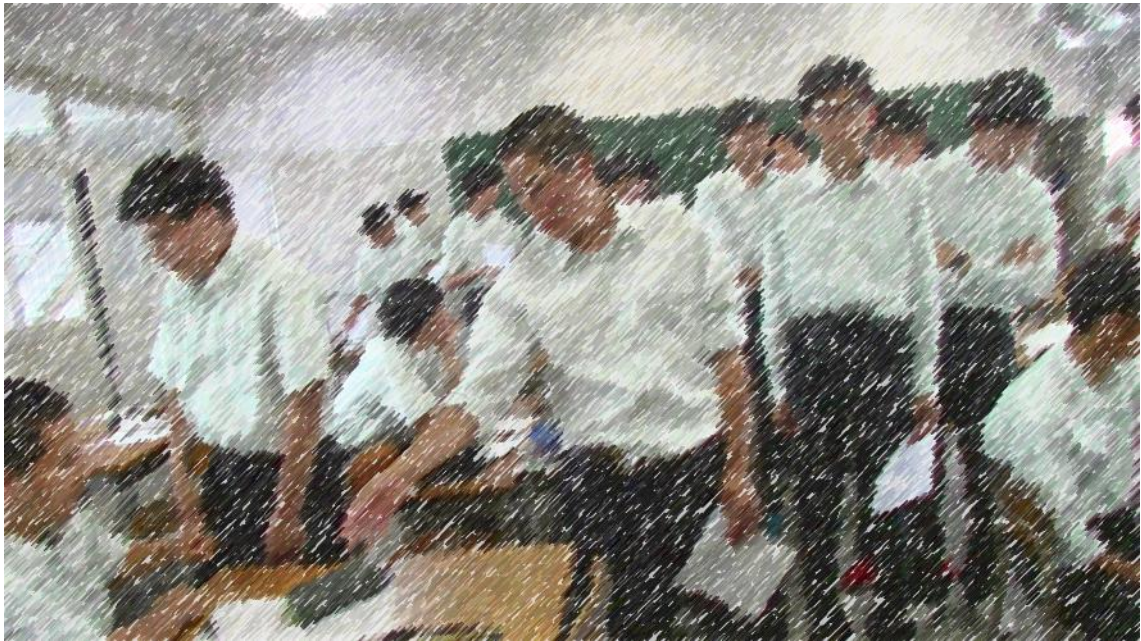


This is the house that Jack build の書写タスクに集中して取り組む生徒達

そして、授業が1度ふえるごとに、書写の長さやチームでのリズム読みテストを1番ずつ増やしていきました。チームについては、まだ、クラス内で人間関係ができていない1年生については、こちらで勝手に決めたチームで、2年生や3年生については、各自で三人以上メンバーを見つけてきてリズム読みテストを受けるように指示しました。

1年生にとったら、この「指定されたチームでのリズム読みタスク」が生徒間の仲を縮めるのにとっても有効だったようです。授業が進むたびに、笑顔や楽しそうに会話する姿を見ることが多くなりました。まさに授業が「仲間づくりの場」となっていました。さらに集団でやることで、さぼれなくなり緊張感が出てよかったです。

そして必修タスクを終わった後は、各個人が自分のペースで1番ずつ暗記にチャレンジしてきました。いきなり全部じゃなくて、1番ずつ暗記していくのも、生徒には達成感がもてるし、友達とも競争できるし、ゲームのステージクリアみたいで楽しくてやりやすかったようです。仲間と一緒にやったり、お手本を聞いたり、一人で暗記したり、書写したり、いろんな方法でいろんな方向から There is a hole の歌とふれあうことで、生徒達は知らない間に暗唱していました。



リズム読みテストに並ぶ生徒達

「先生が、1回目の授業で、“この歌フル暗記してもらおうで”と言ったときは絶望しました。でもやっていくうちにいつの間にか覚えられていて、達成感を得ることができました。こんな感想を多くの生徒が書いています。今は、This is the house that Jack built をやっていますが、1回目の授業の時に「エー、また歌覚えるの!？」なんていう不満の声もちろん上がりましたが、「やったろやんけ!」と目が輝いた生徒も少なくなりました。そして、英語のリズムのコツをつかんだ生徒は、1~2回の授業でもう9番 the priest all shaven and shone まで覚えてしまいました。やはり、自信というのは強いものです。そして積み重ね、言い換えればスパイラル的な学習は、有効だなと痛感しています。

この1学期の実践で、「音声教材を使った授業運営の王道」が体得できた気になっています。基本三教材以外の歌でもどんどん試してみたいです。

## 6 生徒の声

ここでは、毎日の授業振り返りシートや、原稿用紙2枚の「授業振り返り作文」から特徴的な意見をいくつか紹介します。

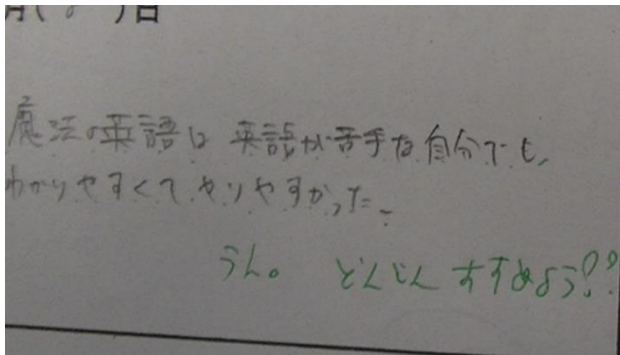
### 6-1 『魔法の英語』との出会い

ここでは、初めて『魔法の英語』に取り組んだ、M科2年生の生徒達の声を紹介します。3年生のH科は、集中して字をかいたりじっくりものを考えたりするのが苦手な生徒が多いからかな? 1年生のN科は中学校の時結構英語ができた生徒がいるので、その生徒たちにとったら『魔法の英語』レッスン1などはすこし物足りなく感じた生徒もいたのかな? もちろん「『魔法の英語』わかりやすい!」の声もありましたが、2年生のM科からの絶賛の声が一番大きかったです。どうやら難易度がちょうど良かったようです。

(なお、『魔法の英語』のレッスンが進むにつれて、N科1年生の生徒達も、『魔法の英

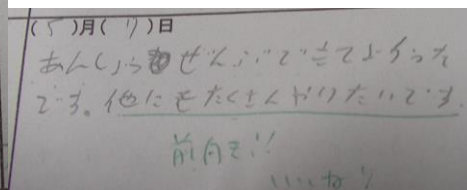
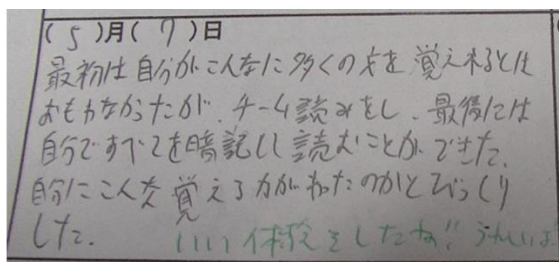
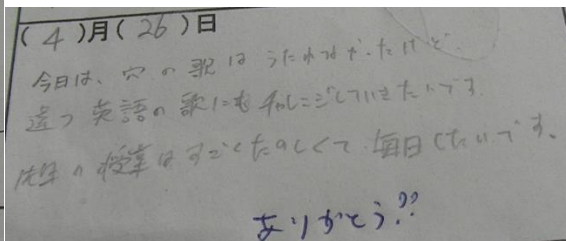
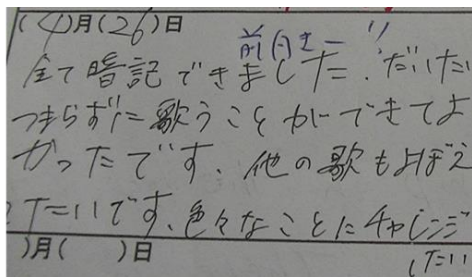






いや、本当に大絶賛でした。今までただわからなかった英語。それが、「記号付け」によって構造が目に見えたことで、「もしかしたら英語をわかるのに何か手がかりがあるのかも？」と言うことを気づけただけでも、彼らにとっては大きなことだったのだと思います。本当に彼らが、『魔法の英語』と出会ってくれてよかったです。

次は、There is a hole の暗唱を突破した生徒達の達成感あふれるコメント達です。



「できた!」「わかった!」という体験こそ、いやそんな体験だけが、次の学習の大きな動機付けになること、生徒たちから改めて教えてもらえました。

以下は There is a hole の暗唱までの道のりを詳しく振り返ってくれた生徒の作文です。

おもて

作

一学期

の授業で学んだこと、  
必修タテマツ。年12月24日

ほ	グ		水	し	と	あ	お	教	ほ	ひ	人の	り	最	一
の	ル	三	て	た	言	ん	い	え	か	は	の	初	期	
の	カ	四	り	あ	あ	の	の	て	り	り	に	に	の	
早	で	日	ず	れ	は	暗	暗	て	に	て	名	に	一	
し	の	の	い	も	最	唱	唱	も	も	大	前	簡	期	
書	早	校	読	も	終	は	の	最	も	人	走	単	の	
き	の	業	み	最	的	最	一	初	英	は	る	な	で	
を	の	で	も	初	に	終	番	学	語	は	ア	換	学	
し	早	は	と	は	は	的	を	業	は	リ	ニ	業	人	
ま	の	三	て	は	無	に	紙	が	ズ	ズ	人	の	だ	
した	授	日	た	読	理	全	に	は	ハ	ハ	快	説	こ	
	業	の	が	み	だ	部	無	と	と	と	画	明	と	
	続	授	日	方	と	言	理	思	女	文	と	ア	一	
	き	業	く	が	と	て	だ	い	法	法	人	ン	ヶ	
	で	の	て	日	思	モ	と	ま	え	え	か	ト	一	
	な	授	大	本	い	サ	思	し	お	お	の	も	ヶ	
		業	変	語	ま	リ	い	ま	用	用	英	書	一	
		の	じ	で	ま	マ	ま	し	え	え	語	き	期	
		続	し	書	ま	王	し	な	こ	こ	は	を	の	
		き	な	き	ま	ま	な	ん	と	と	最	書	授	
		で	な	外	ま	ま	ん	ん	を	を	後	き	業	
					ま	ま	ん	ん	書	書		き	で	
					ま	ま	ん	ん	き	き		き	学	
					ま	ま	ん	ん	な	な		き	人	
					ま	ま	ん	ん	こ	こ		き	だ	
					ま	ま	ん	ん	と	と		き	こ	
					ま	ま	ん	ん	を	を		き	と	
					ま	ま	ん	ん	を	を		き	と	
					ま	ま	ん	ん	を	を		き	と	
					ま	ま	ん	ん	を	を		き	と	

和歌山工業高等

和歌山市租税教育推進協議会

この区切る作業のおかげで1つ1つの単語  
 もおぼえやすくなり、暗唱にも希望が見えてきて  
 した。  
 そして暗唱期間最終日に歌詞を親に読み込  
 んで暗唱の列にならびました。  
 列にならんでいる間も必死で練習していました。  
 いざ本番の時も5番まで止らずにいきま  
 したが、6番のflieaからwinのところで  
 ちよつとミス、大げなミスかできま  
 英語の授業はとても楽しいです。

和歌山市租税教育推進協議会

自分が英語の授業でどんな順番でどんな学習をしてどんな力がついてきたか、ものすごくわかりやすく書いてくれています。上手な作文です。

以下2つは昨年度からの持ち上がりクラスの3年生のある生徒が書いた作文です。

三年生の英語の一学期で学んだ事はいくつ  
 分り、一項目は、動詞についてです。動詞  
 動詞付けられたの動詞、助動詞、助動詞  
 半人前動詞などいくつもあり、一学期で大体  
 之のは、助動詞と半人前動詞です。助動詞  
 は一見ふつうの動詞と見かけがつかなくて苦  
 勞しました。まうい、時は、一学期でおけ  
 たり、一つの動詞の半人前動詞を採るよりに  
 しました。何故なく、助動詞の近くにはない  
 たい半人前動詞がない、大抵は一緒にま  
 り、

和歌山市租税教育推進協議会

こので、動詞の様なものが近くにはつなげられて  
 ると助動詞と半人前動詞を区別すると思ふよう  
 にになりました。

二項目は、前置詞です。前置詞は動詞など  
 と違って、数分見るとわり、くして買っけか  
 たいのじ、何が前置詞で、それの意味がた  
 ばえ、おもしろい知識でした。くして、前置  
 詞はまたお役者の心、どこか分らないでま  
 とめて、いふのが見えてくるのが分りま  
 した。

20x20

今年、一学期の英語で昨年までよくわか  
 なかった、英語の記号付けがようやく少し  
 だけ理解しました。

動詞には丸を、接続詞には四角、前置詞の  
 まとまりにはかっこで、こころ、というよ  
 記号をつけるのです。まれに半人前の動詞  
 という動詞があり、その動詞には半分の丸の  
 記号を付けたいといけたいのですが、私はそ  
 の半人前の動詞がよく分からなくて苦戦して  
 いました。しかし、やっと最近半人前動詞の  
 見わけ方が分かりました。見わけ方が分かる  
 と次からや々と問題を解くことができ、す  
 く楽しく感じました。しかし、まだ完璧に問  
 題が解けたわけではなく、知らない英語の  
 出てくるとその単語が読めないのが記号を付  
 けることができませんでした。なので、これから  
 英語の勉強も頑張ろうと思ひました。

和歌山市租税教育推進協議会

『魔法の英語』の「ブナの木」の話からはかなり英文が長くなってきます。特に準動詞がたくさんでてきます。僕は準動詞のことを「半人前動詞」という名前で生徒に教えてい

ます。この生徒をはじめ、このクラスの生徒達は「記号付けが正しくできるようになりたい=英文の構造が見抜けるようになりたい」という目標をもって、学習を進めているよう  
です。

以下は、"There is a hole"と『魔法の英語』を両方学習した1年生の作文です。

し、か、つ、ひ、の、あ、い、の、ま、ま、は、  
た、い、い、で、す、! (おも) 作

一学期の授業で学んだこと、  
必修タズマズ。

い	り	の	に	語	不	な	く	を	事	し	て	歌	木	こ	さ	一	一	僕
り	は	思	理	は	り	か	言	り	と	て	し	な	さ	の	ま	は	一	は
る	は	い	解	は	は	か	言	さ	思	し	ま	な	ま	歌	ハ	は	つ	今
久	は	ま	れ	は	は	分	ん	ら	い	ま	の	な	ま	に	の	の	月	は
の	前	ま	ら	は	ま	分	く	た	ま	の	た	の	ま	は	歌	の	は	あ
前	置	ま	い	は	ま	分	く	間	ま	の	ま	の	ま	は	出	の	あ	話
に	詞	ま	ゆ	は	ま	分	く	こ	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	で
や	ば	ま	え	は	ま	分	く	ん	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	な
く	や	ま	い	は	ま	分	く	て	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を
す	く	ま	ら	は	ま	分	く	ん	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を
す	す	ま	ら	は	ま	分	く	て	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を
く	す	ま	ら	は	ま	分	く	て	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を
ら	の	ま	ら	は	ま	分	く	て	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を
か	の	ま	ら	は	ま	分	く	て	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を
つ	の	ま	ら	は	ま	分	く	て	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を
ま	の	ま	ら	は	ま	分	く	て	ま	の	ま	の	ま	は	つ	の	の	を

和歌山市租税教育推進協議会

高等学校

と	理	い	こ	思	た	む	か	り	め	解	か	ま	う	け	元	ま
思	解	こ	木	り	人	手	か	か	た	し	り	木	た	と	々	ま
り	し	の	か	ま	の	互	力	力	な	な	録	に	な	と	書	し
ま	な	飲	か	ま	会	い	を	を	な	か	へ	の	な	日	い	た
し	が	り	ら	ま	話	か	合	合	こ	う	で	内	な	が	て	自
た	ら	の	ま	ら	も	仲	ち	ち	い	発	理	容	な	経	い	分
	は	更	た	ま	う	良	の	の	と	展	解	で	て	つ	る	で
	く	語	す	木	ま	く	も	の	思	を	し	は	慣	事	中	ロ
	せ	も	と	フ	フ	な	ス	も	い	発	展	物	れ	に	つ	サ
	た	さ	レ	ア	ア	な	ア	の	す	展	を	語	た	何	と	ハ
	り	う	カ	フ	フ	な	カ	も	し	を	解	を	と	と	見	と
	話	ん	選	英	ア	な	カ	ス	け	解	解	理	と	思	し	し
	サ	と	取	語	フ	な	カ	ア	る	く	く	解	い	い	カ	つ
	た	受	扱	フ	ア	な	カ	を	か	事	い	い	な	知	マ	も
	り	け	た	ア	ア	な	カ	合	う	い	人	い	し	ア	カ	最
	う	し	い	い	い	の	ア	あ	と	初	を	と	に	さ	っ	初
	い	り	け	と	と	ふ	ア	か	互	は	理	解	し	る	た	止

和歌山市租税教育推進協議会

20x20

に最後 ここまで書く!!

本当に今のところ、生徒が主体的に学習に取り組めるいい授業ができています。もちろんまだまだ改善すべきところがありますけれど、生徒達が楽しんでしかもしっかり自分の力を伸ばしながら英語の授業で学習を積んでくれていることが作文からわかり、教師冥利に尽きるなあとありがたく思える今日この頃です。

中間テストが終わって、生徒達も少し慣れてきて、授業中にだれた様子を見せたりし始めているのですが、大幅に何かを変えるとというよりは、生徒がどうやったら楽しんで学べるか、必修タスクをどこまでにするかなど「マイナーチェンジ」でなんとかなりそうです。

7 終わりに～授業中に生徒が自主的積極的に学習にとりくむしかけの極意～

うちの学校でよく見る授業は、先生が一人、前で講義式の授業をしている。生徒は静かにしているけど、かなりの生徒が寝ている。たまに先生が面白いことを言ったら、のりのいい生徒がそれに反応する。そんな反応のある授業いい授業、活気のある授業、授業がしやすいクラスといわれる。

でも、それって本当に生徒が学んでいるんでしょうか？

僕は、スマホ世代の今の生徒達にそのような授業をするのはほとんど無意味だと思います。欲しい情報は自分で探せます。グーグルで検索すれば、ほとんどの問題は解けます。面白くない情報は、スマホの画面をタッチパネルで動かすように、自分でシャットアウトできます。そんな生徒達が、授業中に意味のある学びができるために、どんな環境整備をするのか、それを考えるのが教員の仕事だと思います。

今回、寺島先生ご夫妻のアドバイスを受けて、授業中に生徒が自主的積極的に学習にとりくむしかけの極意が少しわかったような気がします。以下にまとめてみます。

## 1 2段階の必修タスクとボーナスタスク

ここまでは全員が最低限して欲しいというタスクとそれを突破した生徒が学びをやめないようにさらなるタスクを用意しておくことです。これは、毎時の授業、そのタームにおいての2段階に準備しておくことが、先頭と最後尾をつかむために必要なことだと思います。昨年までの僕の実践では、タームにおける必修タスクとボーナスタスクのみ準備していましたが、繰り返しになりますが、今年からは、毎時にもそのようなタスクを準備しているのです、授業がいい意味で「しまる」ようになりました。

## 2 バリエーションのあるタスクの準備

個人タスクだけだと飽きます。チームリズム読みなどのように、授業の中で、クラスメートと一緒に何かする必修タスクを授業内で1つは用意しておきたいです。音声教材の場合は、リズム読みタスクがあるのですが、『魔法の英語』の場合は設定しにくいので、今、「同時通訳タスク」など協力してできるタスクがないか、模索中です。

もう1つは、「黙って字を書く」タスクだけでも飽きるし、「歌を歌うだけ」のタスクも飽きます。その意味では、『魔法の英語』の応用・発展問題は、「英語の構造を知る」という本筋から少し離れて、いろいろなことを考えるいい清涼剤になっています。それと、FLTの先生との「フリートーク」。今年度からは、寺島先生からのアドバイスもあって、必修タスクではなくボーナスタスクとして導入しています。実際英語を使ってコミュニケーションするいい機会として、生徒からは大好評です。

同じ時間、同じタームで、同じ事ばかりするのではなく、書いたり読んだり、黙ったり声を出したり、答えが1つの問題に取り組んだり答えを自分で考えられる問題に取り組んだり、一人でやったりチームでやったり etc…タスクに多様性をもたせることが大事だと思います。もちろん、ただ楽しいだけではだめで、1つ1つのタスクが意味のあるもの、最終的な学習のゴールにつながるものでないといけません。

## 3 スモールステップで達成感を重ねて最終ゴールに向かう。

毎回の授業でやっていることを積み重ねたらゴールにむかえるということを見える化するのは大事です。There is a hole など音声教材の場合は、「フル暗唱」というゴールがはっきり設定されているので、書写やチームリズム読みなどの日々の活動について、生徒達はきちんと意義を感じながら取り組むことができます。

それともう1つ大事なことは、達成感。ただ先生の話聞くよりも、タスクを突破して

それに合格していくというスモールステップのある授業は、生徒に達成感が残ります。とくに暗唱タスクなどは、本当に達成感が残り、次へ次へと学習意欲が繋がっていきます。その意味で、There is a hole や This is the house that Jack built のような積み重ね歌の暗唱は、達成感と学習意欲の向上にとっても効果的な教材だと思います。

『魔法の英語』については、どのページまでいくかが最終ゴールになりますが、それ以外に何かしらのゴールが設定できればいいのですが、これはまだでき切れていません。ただ生徒と僕の間では「『魔法の英語』をやるのは英語の構造を見抜くため」「初めて見た英文でも記号がつけられるようになること」という漠然とした目標意識は持っているとします。ただ、先述したとおり、「この時間は助動詞＋原形に着目させよう」とか「to 不定詞を焦点化しよう」といったその日の目標はなんとなく設定できるようになってきました。

日々の授業でやっていることがしっかりそのタームの最終目標につながっていることを生徒に自覚させることは、絶対に必要なことだと思います。

#### 4 プリントは取りに来させる テストは受けに来させる

これは、本当にそう思います。1年生と2年生は学年で買わしている単語の問題集があって、それを週1ペースでテストすることが申し合わせ事項になっています。はじめはテストを印刷して生徒に一斉に受けさせていたのですが、「何か違うな」という気がしました。

『英語にとって評価は何か』で寺島先生が指摘されていたとおり、有効なテストというのは、①何回でもチャレンジできる ②合格か不合格かしかないテスト だと思います。一斉にテストを配って一回だけのテストだと、今ひとつ教育効果が期待できない気になっていました。

なので、今は、「指定のページの単語を全部覚えたら僕のところに来なさい。僕がその中から5問英単語をいうからその単語の意味をすべて日本語にできたら合格にします。何回チャレンジしても大丈夫です」という方式にしました。この方が僕は生徒の力になるかな？と思っています。自分のタイミングで合格するまで何回でもチャレンジできる。いわば単語テストを「暗唱テスト」と同じ方式に変えたのです。

中には、「紙で一斉にテストをやってもらった方が勉強する気になる」という生徒もいますが、僕は基本的には今のやり方がベターかなと思います。

それと同じことで、試験範囲や連絡事項、歌詞カードなどは、一斉に配るのではなく、欲しいときに自分で取りに来させるようにしています。「与えられる」のではなく、「自分で取りに行く」これも、自律学習者の育成には不可欠な要素だと思います。

思いつくのはこの4つくらいですが、ほかに大事なことを2つあげたいと思います。

ひとつは、「その授業の学習活動で学び方が学んでいるか？」ということです。将来学校を出た後も「自分で学べる」ような「学び方を教える場」になっているかどうか、学術的用語を使うと「学習ストラテジー」や「メタ認知」というタームになるのですが、それらの習得という視点のない授業は、学校教育でやって意味のない授業だと言っても過言ではないと思います。今回、生徒からの感想で「この授業のおかげで勉強の仕方がわか



った」というコメントがありました。個人的にもものすごくうれしいコメントでした。

学び方さえ身につければ、他の人に教えてもらうことなどほとんどないでしょう。しりたいことだけ、「きける」ようになるはずです。

前にも書いたことなのですが、「学習ストラテジー」の究極は「ここがわからないから教えて」と人に聞ける力。自分がどこがわからないかを知って「疑問を作り出せる」力。

今、This is the house that Jack built の暗唱タスクをやっているのですが、今日はある生徒がこんな質問をしてきました。

「先生、the cow with the crumpled horn ってどういう意味ですか？スマホで調べたけどわからなくて」

授業では音声だけを教えて意味はほとんど教えてないので、こんな質問が出てきたと思うのですが、自分で疑問に思っただけで具体的に人に質問できる。そういう力は本当に大事です。「英語がわからない」ではなく、「不定詞がわからない」「準動詞の区別がわからない」など、どこがわからないか自分でわかったということは、ほとんどわかったも同然です。そういう生徒は、質問がどんどん具体的になっていくはず。自分の到達点や自分のつまづきを俯瞰して見つめ直す力、それこそ「メタ認知」です。そういう力を生徒にどうやってつけていくか、考えていきたいと思えます。

もう1つは、「言語化」です。先日メーリングリストで紹介してもらった内田樹さんは講演の中で、「言葉になる前の思考の星雲にアクセスできるのは母語だけ。思考を深めたり、新しい思考をうみだしていくには、母語力を向上するしかない。母語力の涵養こそ外国語教育の目的」と訴えられていました。寺島先生がいつもおっしゃる「母語を耕す」ということと同じ事をおっしゃられています。授業振り返りシート、授業振り返り作文、学校や社会に対する不満など、とにかく生徒が自分の思いを言葉で表現する機会を意図的に増やしていくこと。そこは、意識をしていきたいと思えます。

長々と書きましたが、「協力」「達成感」「学び方を学ぶ」「与えられるのではなく求める」「言語化」。これらが、生徒が主体的に学び、学ぶことに意義のある学習を授業で生徒に体験してもらうキーワードになると私は思います。

寺島ご夫妻からお電話で相談させてもらって2ヶ月。理想的な授業開きでスタートした2019年度の実践。年度初めの緊張感がとけ、天候が蒸し暑くなるにつれ、学校生活に慣れていくにつれ、クラスによっては、生徒の学びのパフォーマンスの低下が見られるクラスも正直出てきました。しかし、ご夫妻からアドバイスいただいたこと、ここで考察したこと、立ち返れば何かしらの対策はたてられるのではないかと、そんな気が今はしています。ただ、以下の点は少し気になっていることです。

1 『魔法の英語』と音声教材が終わった後、どう授業を「形象読み」「構造読み」などに発展させていくか。一応、『魔法の英語』を走りきったあとは、本文を個人やチームで分担して「教科書を『魔法の英語』にかえちゃおう！プロジェクト」をやろうと思っていますが、その後です。その後は、「独裁者」とかI have a dreamで行こうかな？と思っていますが、生徒の様子などを見ながら、ボヘミアンラブソディやThe Greatest Showman

や Les misrables 等の映画を使った学習なども視野に入れてもう少し考えようと思っています。

2 同僚性の問題です。僕が授業にいないクラスの生徒から「同じ学年で英語の学習内容が違うのが納得できない。中西先生の授業、教科書使ってないから、点数とりやすいからずるい。」という声を最近ちらほら聞くようになりました。生徒間で不公平感がでてこないか、たとえば担任の先生や英語科の他の先生、あるいは保護者からクレームがくるのではないかと、日々すごく心配しているところです。

3 必修タスクをどこまでに設定するか。意欲の高い生徒が多いクラスは、「必修タスク」の分量を少なくして、ボーナスタスクを増やした方が、生徒のパフォーマンスは向上します。しかし、学習意欲の低い生徒が多いクラスだと、「ボーナスタスク」という「えさ」はあまりきかず、「必修タスク」が終わると、学びをやめてしまう生徒が目についてきます。その「さじ加減」がまだ僕の中で身につききっていないので、もう少し試行錯誤していかないといけないと思っています。

たとえば音声教材だと、書写の量を増やすとか、『魔法の英語』だったらその日すべきページ数を増やすとかそんなことしか、今のところは思いつかないのですが、それを増やしすぎると、「楽しむ」よりも「苦しむ」要素が濃くなってくるような気がして、あまりうまくいかないと思います。たぶんその解決のキーは「そのクラスの最後尾の生徒でも少し背伸びをすれば届く難易度のものを必修タスクにする」ということになるのでしょうか・・・。大学と違い、赤点30点というのがやはりネックです。テストにせよ、授業中の学習活動にせよ、3割を突破すれば、赤点が回避できるというのは、甘すぎますよね。必修タスク突破から満点の100点までの間が開きすぎているからです。大学のように赤点が60点くらいだったら、もっと生徒に火をつけるやり方があるようなのですが。

#### 4 「できる」と「わかる」のバランス

音声教材の授業だと、「できる」ことが焦点になります。『魔法の英語』だと「わかる」ことが焦点になります。最近少し授業がマンネリ化しているような気がしているのですが、もしかしたら、授業の中で、どちらか一方の活動に偏っているせいかな？と感じています。音声教材の授業でどう「わかる」の要素を入れていくか、『魔法の英語』の授業でどう「できる」の要素をいれていくか。少し考えていきたいと思っています。

#### 8 書き足し

～実践後で寺島先生からいただいたご指摘と、実践を振り返って感じたこと～

本論の本篇は、1学期中間テスト後の6月初旬時点までの実践をまとめたものです。その後期末テストが終わった7月に、寺島先生と電話で話す機会があり、その際いくつか重要な指摘をいただきました。さらに、今1学期の期末テストが終わり、2学期の授業が始まっています。本節では、そんな中で、私が感じたことを徒然と書き足していきたいと思っています。

## 1 進捗表とボーナスタスクのありかたについて

今回の実践では、先述したとおり、必修タスクおよび様々なボーナスタスクのポイントを、一枚の紙で用意していました。この進捗表に関しては、後日、寺島先生から、「これでは各生徒が発展・応用問題や白文記号付けをどこまでやったかが、教員にとっても、生徒間においても見えにくい。必修タスク用の進捗表、発展・応用問題用の進捗表、白文記号付け用の進捗表という3種類の進捗表を用意して、どの生徒がどこまで進んでいるかが、可視化できる進捗表を用意すべきだ。それと、『魔法の英語』のボーナスタスクをやってから、ほかのボーナスタスクに挑戦できるようなシステムにしないといけない。これでは、いつまでたっても、見える学力である”英文に記号付けができるようになる“という最終ゴールにたどりつけない。」という指摘をいただきました。これからの実践の改善点として肝に銘じていきたいと思います。

それと、ボーナスタスクが「生徒が教員に媚びを売る」手段になっていないかが気になるところです。生徒が、成績向上のために、ボーナスポイントになることだけ一生懸命取り組むのは本末転倒です。ボーナスタスク導入の目的は、あくまで「生徒の自主的・積極的な学びのきっかけ」であることを忘れないでおきたいと思います。

## 2 AさせたいならBの指示を

今回の実践を通して、強く実感できたことです。たとえば、There is a hole の見かけ上の最終ゴールは、歌詞の暗記なのですが、実は、音声教材で生徒に身につけて欲しい「幹」は、「英語のリズムの等時性を体でたたき込む」です。『魔法の英語』実践で行くと、見かけのゴールは「指定された日に指定されたページまで進めること」なのですが、本当のゴールは、「英文の構造を読み取る力をつける」です。

英語の授業で身につけて欲しい、「幹」は、そんなに多くないと思います。「リズムの等時性」「英文の構造＝日本語との語順の違い」「構造読み」「形象読み」くらいでしょう。大事なものは、どうやったらそれらの「幹」が、効果的に生徒に身につくか？その具体的な活動を発想できるかどうか、教員の専門性だと思います。これは、会議での発言や、スピーチやプレゼンテーションなどでもきっと同じ事です。言いたいこと、伝えたいことをどう伝えたら一番相手に伝わるか。その想像力と発想力を鍛えることが、これからの自分の授業実践や人にもものを伝える文章や発言の質の向上につながると思います。

実は、3年生のH科では、実践が今ひとつ軌道に乗っていません。『魔法の英語』も「音声教材」の実践も、最低限の必修タスクをいやいやこなす、やっつけ仕事でしかない雰囲気が漂っていました。改善策として、寺島先生からいただいたアドバイスが参考になりそうです。

「進路実現という外的動機付けのない工業高校生には、“君たちには、期限内に与えられたタスクをこなすことで集中力と持続力と計画力を身につけてほしいんだ。企業が欲しいのはそんな力をもった生徒だ。そのための『魔法の英語』だ、というスタンスで行った方がいいかもしれない」

もちろん、本当に身につけて欲しいAは、英文の構造をつかむという「見える英語の学力をつける」ことです。しかしH科の生徒には、それを陰に隠して、「集中力・持続力・計画力をつけるため、とにかくその日指定されたページをやりきるのが大事だ」というB指示を

出すほうが良さそうです。たぶん、大多数の生徒は「解答篇」丸写し作戦でくるでしょう。それに目くじらを立てず、生徒の方から、「この記号ってどういう意味あるんやろ?」と聞いて来るのをじっくり待ちたいと思います。

### 3 『魔法の英語』 実践後のテスト問題をどうするか?

『魔法の英語』を教材として使った後の定期テストの問題で「これ!」というものが作られていません。英文から動詞や前置詞のまとめりや連結詞を見つける問題、助動詞と準動詞を見つける問題、助動詞+準動詞の組み合わせ(完了形、進行形、受け身など)を見抜く問題、複文を単文に分解する問題、ネクサスを見抜く問題、和訳する問題、英訳する問題などを出題しましたが、生徒にとっては難しすぎたようです。

4 以下の英文を読んで問いに答えなさい 各2点 計16点

Little Prince: 1 What do you sell?  
Merchant: 2 I sell pills.  
Little Prince: 3 What kind of pills?  
Merchant: 4 Swallow one pill, and you will not be thirsty for a week.  
Little Prince: 5 Why are you selling them?  
Merchant: 6 Because they save a lot of time. 7 With these pills, you can save (fifty-three minutes) every week.  
Little Prince: 8 And what do I do with those fifty-three minutes?  
Merchant: 9 Anything you like...  
Little Prince: 10 Oh! 11 If I have fifty-three minutes,  
12 I will go to a spring to drink fresh water.

問1 2の文から動詞を見つけて○で囲みなさい。  
問2 7の文から前置詞のまとめりを見つけて( )で囲みなさい。  
問3 11の文から連結詞(従属接続詞)を見つけて書き出みなさい。( )  
問4 7の英文から助動詞を見つけて書き出みなさい。( these )  
問5 4の英文から助動詞を見つけて書き出みなさい。( be )  
問6 5のように助動詞beのあとに半人前動詞(ing形)が来る組み合わせをなんといい、どんな意味を表すのか?以下から適当な○をしなさい。  
(あ) 現在進行形 今~している (い) 現在完了形 今までに~してきた (う) 現在の受身 ~されている  
問7 12の英文の表す意味を日本語で書きなさい。  
[ ]

あるクラスの1学期期末テストの問題の一部

1学期の期末テストは、どのクラスもとても低い平均点でした。授業での生徒とのやりとりでは、「○って何につける記号なん?」「be動詞+ing形の組み合わせってなんていうんやっただけ?」などという問いかけを毎回やって、生徒の理解力も上がってきている手応えがあったのですが、テストの後、多くの生徒から「先生、テストむずかしすぎ。げきおこ!」と批判されました。生徒が『魔法の英語』で大きな力を身につけつつあるのは、生徒が書いた「授業振り返り作文」を読めば、しっかり伝わりました。でも、まだ、テス

トで点数という形で力がついた実感を持たせてあげられなかったのが悔しかったです。

せっかく1学期の中間テストで高得点を取った生徒が、「私にも英語ができるかもしれない！」とやる気をもったかもしれないのに、そのやる気をそぐことになったのでは？と生徒に対してすごく申し訳なかったです。

1年間でどのくらいまでの力をつける見通しをもつのか？そのために、1学期や2学期の定期テストでどのくらいまでの出題をするのか？まだまだ研究が必要だと痛感しました。

#### 4 日々の振り返りシート、ターム後の振り返り作文の位置づけ

ここ数年、「授業振り返りシート」というものを配布し、毎授業後に生徒に提出させています。何もなしだとなかなか生徒は取り組まないのですが、今年度は、提出した生徒にはボーナス加点をあげています。中にはすごく細かく、その日の授業で取り組んだ内容や、感じたこと、発見したことなどを書く生徒もいます。This is the house that Jack builtの学習の際にこんな発見を書いていた生徒がいました。

「“the は名詞の前、that は動詞の前に来る”で合ってますよね？」

そんな発見は、ぜひ全体でシェアしてみんなに広げたいものです。

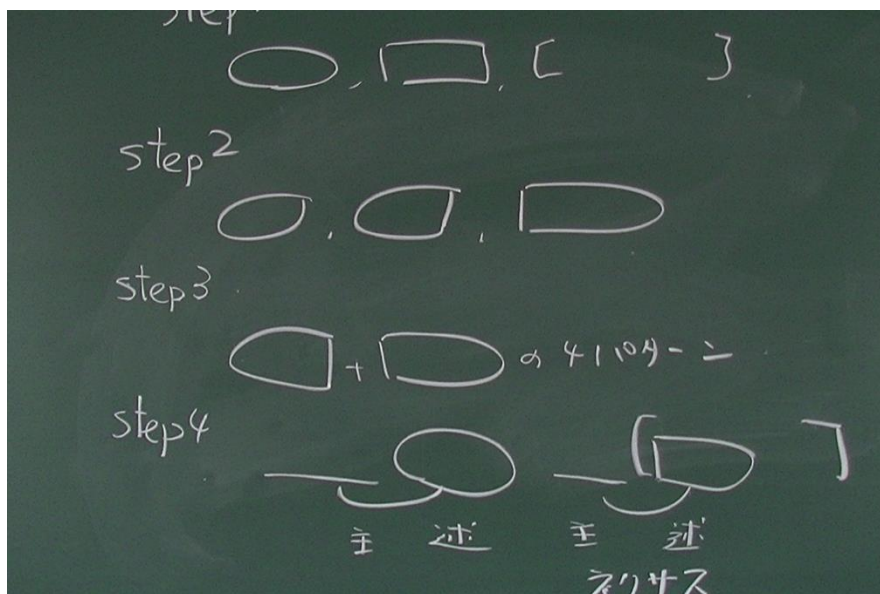
そして、面倒ですが、生徒の感想にはすべて私からの返しをつけています。このように生徒の理解度や授業の改善点をつかむ、また、生徒との関係をよくするのに、この振り返りシートは非常に役に立っています。

ただ、「今日の授業、面白かった（しんどかった）」などといった感想しか書かない生徒も多くて、本当の意義である「生徒のメタ認知力の向上」にはつながっていない気がしています。学期末に提出させている「各タームで生徒が自分の学びを振り返って書く作文タスク」も同じ事です。生徒はなかなか授業の振り返りだけでは、規定の字数を突破できません。書くことがないほど、生徒が自分の成長を実感できていない内容の薄い授業だということは受け止めないといけません。ただ、それだけではなく、生徒が書きやすいように「作文の手引き」を出す必要性があると感じています。寺島先生の新著「レポートの作文技術」にあるように、

「体験（学習、読書）の要約（または引用）→感想→新たに生まれてきた疑問」を意識して生徒に自分の学習の振り返りを書かせるようにもっていきたいものです。

#### 5 『魔法の英語』、点検時に生徒に何を語るか。

最近では、『魔法の英語』実践では、毎回の授業時に以下のような図を板書しておくことにしています。



そして、今日のタスクを終えて生徒が見せに来るたびに  
「〇って何につけるんやっただけ？」  
「今日やったところで、助動詞どれ？」  
「この助動詞 have+半人前動詞の過去分詞の組み合わせ、なんていうんやっただけ？」  
等と聞くことにしています。

授業内で全体で生徒に説明することはほとんどないので、生徒にとったら逆にこの僕の一言が印象深いようです。生徒の振り返り作文の中に  
「わけのわからない話を長いこと聞かされるよりも、一言で短く説明してくれてわかりやすい」

というコメントがありました。『魔法の英語』の実践の時、教員が説明すべきことって本当に、板書のステップ4までだけです。細かいことはあえて言わず、生徒から、

「先生、半人前動詞と助動詞の区別がわからないんですけど・・・」

「前置詞はみぬけるけど、前置詞がどこまでかかるかが、見抜けない」

「助動詞ってどれくらいあるのですか？」

などという質問がでてきたらしめたものです。生徒が疑問に思ったことに対する説明なら、生徒は聞きます。今は、僕が皆までいうのではなく、「どうやったら生徒からいい質問を引き出せるか？」を考えて、説明できるようになりたいと考えています。

## 6 「切る勇気」を持つこと 必修タスクのラインを高めを設定すること

2学期の前半は以下のような計画で授業をすることにしました。

1年生	We will rock you (音声教材) 『魔法の英語』 レッスン 12-14
2年生	This is the house that Jack built (音

	声教材) 『魔法の英語』 レッスン 10-12
3 年生 H 科	We Will Rock You (音声教材) 『魔法の英語』 レッスン 8-11
3 年生 O 科 P 科	Imagine (音声教材) 映画 Beauty and the beast Prologue のリズム読みと和訳

本当は、『魔法の英語』を走り終わった3年生のO科P科では、チャップリンの独裁者の表現読みを入れようと準備しかけていました。ただし、1学期期末テストのできが非常によくなく、まだまだ生徒に英語の構造を見抜くという「見える学力」をつけられていなかったということ。さらに、私自身の教材に対する「熱意」の薄さや教材と生徒を近づける資料の準備の見通しがたたなかったこともあり、今学期は断念することにしました。

それはさておき、結果、どのクラスも2学期前半は音声教材を使用することになりました。今学期から少しやり方を変えたのは、音声教材を使った授業においても、『魔法の英語』の時と同様、その日すべき最低限のタスクをきっちりと決めることにしました。

たとえば、Imagineの授業だと、黒板に

今日の必修タスク

- ① 和訳プリント No.1
- ② チームリズム読みテスト (2人~4人) 1番フル
- ③ 1番の書写2回
- ④ 1番の前半までの暗記テスト

今日のボーナスタスク

- ① 書写おかわり
- ② アレントーク
- ③ 振り返りシート記入

と板書しておきます。

1学期はその日すべき必修タスクができなくても、ファジーにしておいて、テスト前になったら生徒を呼び出してやれていないタスクをやらせるという「いつもの悪い癖」が出てしまっていました。2学期からは一大決心をして、「後出しは絶対だめ。その日すべきタスクがその日中にできなかつたら、どんどん減点していく」というシステムに変えようと思っています。ほかの先生にとったらごく当たり前のことかもしれませんが、私にとったらその「割り切り」をするのにかなり勇気がいります。なんか生徒を「切っている」気がして、実は今でもどこかに吹っ切れていないところがあります。もしかしたら、やっぱり、情にほだされてテスト前に未提出のある生徒にもう一度チャンスを与えるという「いつもの愚」をやってしまうかも知れません。授業内で、やるべきタスクをしようとしないう生徒の姿を見るのは、ストレスがたまります。怒ったりなだめたりして、なんとかやらせようとしたくなります。しかし、今回は、寺島先生のお教えにのっとなって

「そんな生徒はほっとけばいいんですよ」  
のスタンスで行ってみようと思っています。

そんな中で、生徒を信頼して、「必修タスクのラインを高めを設定する」勇気もいるかなど少しずつ感じています。ちょっと背伸びをしないと届かないくらいのラインにした方が、生徒は伸びるんじゃないかと。「クラスで一番のスローラーナーでも頑張れば届くところ」が、どこなのか。まだまだ模索は続きます。

## 7 期末テスト後の生徒の授業振り返り作文

最後に、期末テスト後に、生徒が書いた「授業振り返り作文」をいくつか紹介します。いつかは、生徒に「作文の手引き」を配って、「引用→感想→新たな疑問」というサイクルで振り返り作文を書かせることで、「学び方」と「書く力」の向上を目指したいのですが、まだまだ、道半ば。それと、「量を書かせる」ことも大事ですよ。まだまだ私が生徒に要求している「量」は少ないです。この2つを意識して、生徒にどんどん作文を書かせていきたいと思います。

2年生 Mさん

私の中で英語の印象はものすごく悪いものでした。1年生の時やってもらった英語の授業はとてもじゃないけれど、私には理解できませんでした。そのときの授業は前で人が自分で勉強しているようにしか見えませんでした。2年生になったとき、自分で書いて提出や、自分で覚えて発表するなど、どれも生徒自身が体を通して学ぶことができたのです。そのおかげで、先生の難しい話を聞くことなく、自分で理解できるようになったし、たまに先生が話してくれる話はとても短くすらすら頭に入ってくるものです。めずらしく英語をやる気になったので、2学期3学期頑張ってみようと思います。

『魔法の英語』は本当にすごいと思います。英語が嫌いだった1つの要因の英語のテキストですが、辞書が必要ないのです。いつもは辞書を隣におき調べながらといていくという手間がはぶけ、問題が中断されることなく解くことができるので、入るべき本来の文法が頭に入ってくるのです。

1年生 Mくん

中間テストが終わって、一発目の英語の授業で、今回の歌が発表された。最初聞いたとき、「暗唱するのむっちゃむずかしそう。」と思いました。でも、山田が、いきなり4番まで暗唱して、僕はとても不安になりました。

しかし次の授業では3番まで暗唱することができました。その後も、順調に4番、5番、6番と暗唱できました。最初は、暗唱できるか不安でしたが、10番まで暗唱できてよかった。この歌の最後の日に、クラスみんなの前で1番から9番まで暗唱することができた。その授業が終わってから中西先生のTwitterで

「今日は、クラスの前で歌ってくれた6人の人たち、クラスのみんなのお手本になってくれてありがとう」

と書いてくれていてとてもうれしかったです。

今回の歌を通して、英語のリズムや単語と単語のつなぎ方を学んだだけでなく、



暗唱する楽しさを学びました。

『魔法の英語』では、中間の時にはでてこなかった「受け身」や「現在完了」、「連結詞」が出てきて、とてもややこしかった。でも何回もやっているうちに、英文の特徴がわかってよかった。中間の時よりも、単語や英文が難しくて時間がかかったけど、しっかり納得して『魔法の英語』に取り組むことができてよかった。夏休みが終わって2学期も頑張りたい。

### 2年生 0さん

1学期の授業で、学んだことは、『魔法の英語』をすれば、テストの時にすごくやくにたつなって思いました。動詞、助動詞、前置詞、半人前動詞、主語、接続詞、関係代名詞、過去分詞、の使い方、使い分けが上手にできるようになったと思います。『魔法の英語』をつかってべんきょうするようになってから、だんだん英語が、好きになったように、おもいます。『魔法の英語』を、はじめてから、英語のテストがいやじゃなくなりました。小学校の時と中学校の時は、英語がだいきらいで、できるだけ授業にでたくなかったけれど、今年は、楽しく英語の授業を受けれているなっておもいます。今年の英語の授業は、今までと全然ちがって、今まではだまって先生のはなしをきいて理解するスタイルだったけれど、今は、ワークをして実際に問題をするほうがわかりやすいし、自分でやった方が、やらなきゃだめだなって気持ちが出てくるのでやる気につながっていると、私は思いません。けれど、やっぱり、英語は難しいし、理解不能なこともあるけれど、自分でできたらとてもうれしいので、頑張ってみようとおもいます。

この1学期だけでも、とても英語が、好きになったし、もっともっと知りたいなって思うようになりました。これから、もっと英語は難しくなってくると思うけれど、頑張ってみようとおもいます。

### 3年生 0君

今回の『魔法の英語』は全部自分の力でやったのですごく達成感があります。僕は友達と一緒にすると、ちゃんと集中できなく、全然進まないの、今回はほとんど一緒にせず、一人で黙々とやっていました。最初の方はわからなかったの、友達に聞きに行こうとしたけど、やめて自分で何回も考え直して、それでちゃんと理解して書きました。それを繰り返していくうちに、少しずつだけれど、できるようになっていき、途中止まって、しっかり考え直すところもあるけど、だいたいのところは、止まらずにすらすら書けるようになりました。スラスラ書けるだけで、間違っているところも、まだまだたくさんあります。それに、その日のうちにクリアしないといけないノルマ+次の授業の分のノルマを一回の授業の内にしてしまうようにしたので、余裕も持っておちついてリラックスしながら、書けたので気持ちの面でもやりやすかったです。たまには、こういうまじめに勉強にとりくむのもいいなと思いました。英語の今の必修タスククリア 30点は、自分にとって得でしかないの、すごく真剣に取り組めます。それに積極的にとりくもうとする気持ちが、最近の自分にはなかったの、よかったです。

### 2年生 T君

1学期の前半では、歌の歌詞を覚えたりしました。中学の頃の英語からとは全く違った授業の方法でした。英語は苦手な授業も好きじゃなかったけど、歌を覚えて歌ったり、歌詞を書いたりすると以前よりもすごく楽しみになってきました。もう今では、こんな授業にも慣れてきて、授業が始まる前から『魔法の英語』を進めたり、本文の○や[ ]やはんまるなどの記号の意味もわかってきました。また2学期も歌なら、今学期よりも難しいものだと思うけど、前の歌と同じように、歌詞や、リズムなどをしっかりと覚えられるようになりたいです。そのためにも、毎授業欠かさず歌詞を書き写したり、友達と歌ったりしたいです。

『魔法の英語』も、単語の意味がわかれば、訳すのも簡単にできるようになったし、意味をくみ取る事ができてきました。記号つけも新しい記号が出てきたり、新しい意味が増えたりするかもしれないけど、今のところ出ているのは完璧に何も見ずにできるように勉強をしたいです。

#### おもな参考文献

寺島隆吉・寺島美紀子編(2001)『魔法の英語』あすなろ社

寺島隆吉(2002)『英語にとって「評価」とは何か?』あすなろ社

寺島隆吉監修山田昇司編(2016)『寺島メソッド 英語アクティブ・ラーニング』明石書店

寺島隆吉(2019)『寺島メソッド「日本語教室」レポートの作文技術』あすなろ社

内田樹の研究室「英語教育について」[http://blog.tatsuru.com/2019/05/31\\_0824.html](http://blog.tatsuru.com/2019/05/31_0824.html)

[2019年7月14日](#)検索